

1. 主題 自然とかかわる活動や体験を通して、自然の不思議さや面白さを実感する  
『グリーンカーテンプロジェクト』

2. レポートの要点

**自分たちの生活を見つめ直し、環境学習を通して、自ら考え実践できる生徒を育む取り組み**

3. 目標 ①自分と身近な植物との関わりに関心を持ち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。  
②自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。  
③具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

4. 概要 本年度、特別支援学級の理科を週3時間担当することになった。  
それぞれの生徒の時間割は、交流学級の時間割をもとに編成されているため、毎時間同じメンバーではない、また発達状況に応じて、年度当初は交流学級での理科の授業を受けていた生徒が、途中で支援学級で学習するということもあり、同一の学習内容・進度で授業を進めることは非常に難しい。  
そのため、本来、毎時間の学習を積み上げていくべきところ、投げ込み教材的に扱わざるを得ないことが多く、授業での実体験が記憶に残りにくいのではないかと感じる。  
平成24年に開かれた初等中等教育分科会での、特別支援教育の在り方に関する特別委員会で、『障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備』という報告を見つけた。

○「合理的配慮」とは、「障害のある子どもが、他の子どもと平等に「教育を受ける権利」を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて、学校教育を受ける場合に個別に必要とされるもの」であり、「学校の設置者及び学校に対して、体制面、財政面において、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」、と定義した。なお、障害者の権利に関する条約において、「合理的配慮」の否定は、障害を理由とする差別に含まれるとされていることに留意する必要がある。

「合理的配慮」の考え方については、特別な支援が必要な子どもの中には、必要かつ適当な変更・調整を行わなければ、授業が分からない、学習活動に参加している

実感が持てない子どもが見られ、そのような場合に必要とされると考える。

授業のユニバーサルデザインにより、特別な支援の必要な子どもに焦点を当て、その子どもを包括できる授業を構成し、指導目標を焦点化したり、視覚化により見通しが持てたりするなどの必要に応じた個別の配慮をすることも、「合理的配慮」かと考えた。

支援学級での理科では、今までの学習してきたであろう内容の記憶の断片を探りながら授業を展開しつつ、理科教育・環境教育での感動を大切に、今後通級での授業への意欲を持てるようにしたいと考えた。

そこで、本年度は、植物の栽培を通して、その生長に対する喜びや感動、命の尊さなどの感動をさせてみようと考えた。

当初生徒1名（2年生、9月から1年生1人増担当した。）と、緑のカーテンとして、ゴーヤ、風船カズラ、朝顔の栽培に取り組んだ。これらの植物は様々な恵みをもたらす、子どもの興味関心を高めることができる。開花や収穫、つるの成長など、植物の生長そのものもちろんのことながら、緑のカーテンによって、涼しさをも得られる。それは、地球温暖化やヒートアイランド現象などの環境問題へ発展的な学習へつなげていくことができる。

栽培をはじめてみると、案の定、今まで植物の栽培について、種をまく、苗を植え替える（間引きを含め）など、小学校で多くの児童が体験していることについては全く知識・技能がなかった。さらに、培養土などをプランターに移し替えることも初めてだったようで、1時間の授業の中で、多くの作業体験を行うことは難しく、一つひとつを丁寧に実体験させていくことで、植物の栽培を通じて、様々な技能を身につけていけるよう、ゆっくりと進めていくことに重点を置いた。

しかし、植物を栽培していく授業では、うまく成長せず途中で枯れてしまったりしては残念な気持ちしか残らない。何冊か栽培書なども読んだが、やはり専門科の指導を受けるのが一番と考えた。

また、自分自身1年生理科を3時間持っており、同時期に植物の体のつくりを学ぶ単元で、子葉の違い（単子葉、双子葉）、蒸散作用等について学習するので、支援学級での内容とつなげながら進めることができた（途中支援の理科に入って来た生徒は途中まで通常学級の理科を受けていたため）。なお、緑のカーテンについては、興味関心の観点として定期テストに出題した。

この取り組みを進めるうえで、以前、元JAグリーン津店の山下和仁さんをアドバイザーにお招きし、種まきや苗の植え付け、肥料の与え方などの指導を受けた。事前に、担当教師も、適切なプランターの大きさや、栽培に適した場所の選定なども丁寧に指導していただいたことをもとに実施し、本年度も成長過程において直接生徒には指導をしていただいていたが、数回来校し助言をいただいた。

週2回の授業において、スケッチや手入れなどを行い、また模造紙へ成長の様子をまとめた。

また、本校技能員に、カーテンの土台?として、竹とロープの廃材を活用して作成をしていただき、設置場所は照度の関係を含め、学校長、支援学級担任に相談し設置した。





## 5. 反省（課題）

ゴーヤを育てていくうちに、日々成長する植物のたくましさや緑の葉の美しさなどに感動する体験は持たせることができた。設置した場所が全校生徒が通る廊下の窓だったため、多くの生徒が緑のカーテンでゴーヤが成長する様子を観察する姿も見られた。

また、生命の不思議や尊大さ、命の大切など情操の部分にも触れることができた。

植え付けの時期がやや遅かったためか、緑のカーテンに成長する時期が夏休み期間中になってしまい、緑のカーテンのもたらす環境への影響について調べ学習をすることができなかった。

来年度は、支援学級担当の教員と相談しながら、理科だけでなくできる限り全員がそろって活動できる工夫をしていきたいと思う。

### 【参考文献】

- 1) 文部科学省, 2012年, 中学校学習指導要領解説「理科」
- 2) 放射線等に関する副読本作成委員会, 2011年, 『知ることから始めよう 放射線のいろいろ』
- 3) 特別支援教育の在り方に関する特別委員会(第14回), 2011年, 特別支援教育の在り方に関する特別委員会及び合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループにおける意見の概要(資料3-1)
- 4) 初等中等教育分科会(第80回), 2012年, 障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備(資料1)
- 5) NPO法人緑のカーテン応援団, 2011年, 『育てて楽しむはじめての緑のカーテン』, 家の光協会
- 6) NHK出版編集, 2014年, 『趣味の園芸 イラストでわかりやすい緑のカーテンの育て方』, NHK出版
- 7) 菊本るり子, 2012年, 『みどりのカーテンをつくろう』, あかね書房
- 8) サカタのタネ「緑のカーテン」普及チーム, 2013年, 『花も実もある よくばり! 緑のカーテン』, 農村漁村文化協会